

38
光村 小国 427

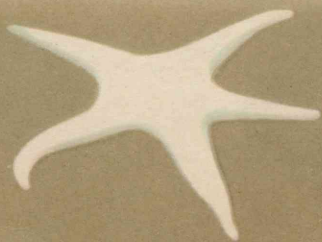
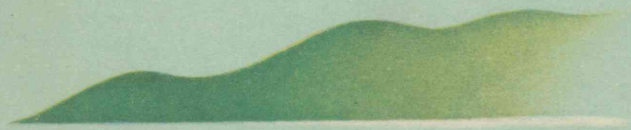
垣内松三著

教育部
資料室

なぎ

新国語 四年 中

文部省検定済教科書



KC
Mi65

教
3
01

60145

教科書文庫

6
860
34-1950
01304
49971

Kodak Gray Scale



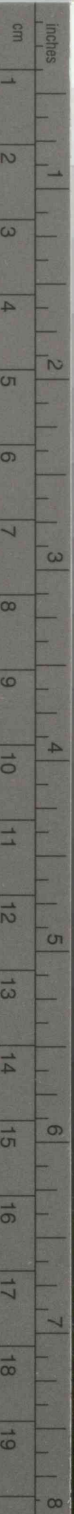
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



指導者のために

(一) この本は、資源の保護利用と人間の生活に取材し、文明と社会の進歩に対する努力に関心を深めながら、身心の発達即して国語学習における諸作業を自発的創造的に導くように組織し編集してある。特に言語活動を中心として、表現の学習が興味のうちには有機的発展的に行われるように努めた。

(二) この本の内容は、次の四つの題目に分かれている。

一、谷川の音

治山治水による諸資源の保全を主題として、生活文・伝記などを提出し、国土計画に対する関心を高めながら言語能力を伸ばすことにする。

二、海に生きる

水産資源と海浜の生活を主題として、詩・戯曲・講演記録を提出し、海国民としての生活意識を深めながら言語生活を多角的に展開することにする。

三、展らん会

児童の製作活動を主題として、手紙・生活文などを出し、製作に対する態度と、廃物利用に対する関心を養いながら、具体的な言語活動の分野を広げるとにする。

四、人々のために

この本の趣旨を総合して、国土と公益のために奉仕した人々を主題とし、詩・物語などを提出した。さらに国土資源に対する理解と開拓の精神を強調しながら、言語教養を高めることにする。

(三) この本に提出した新出語は三三六語で、毎ページの新語率は三・一七語である。学習の仕方・新語表・新字表を掲げて使用上の便を図ると共に、文章は敬体口語を主としながら次第に常体口語にも慣れさせるように留意した。

(四) この本のさし絵は、学習上重要な位置を占めるので特別な考慮が払われている。

(五) この本の使用期間は、だいたい九月から十二月までを目標として、大題目を平均一か月あてとしたが、それを固執する必要はない。地方の実情と児童の個人差を考慮して有効に活用されたい。

(右は本書編集の概要である。詳細は新国語指導書を参照されたい。)

寄贈

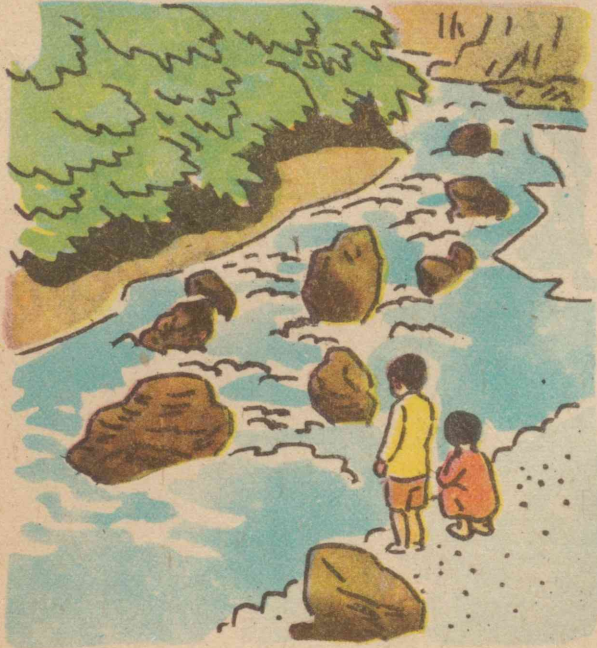
教科書文庫
6
810
34-1950
0130449971

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

な
ぎ
や

広島大学図書

0130449971



新国語島大學年中
教育學部圖書

広島大学図書

0130449971





もくろく

一 谷川の音……………4

- (一) 谷川の音
- (二) あらしの日
- (三) 四品の人

二 海に生きる……………33

- (一) なぎさ
- (二) 海べの子ども
- (三) くじらを追って

三 展らん会……………59

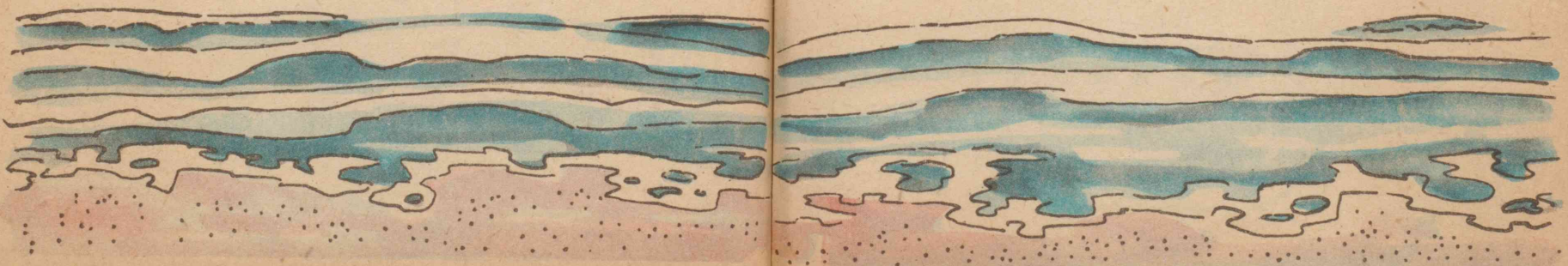
- (一) 案内状
- (二) 展らん会
- (三) ぼくのトラック

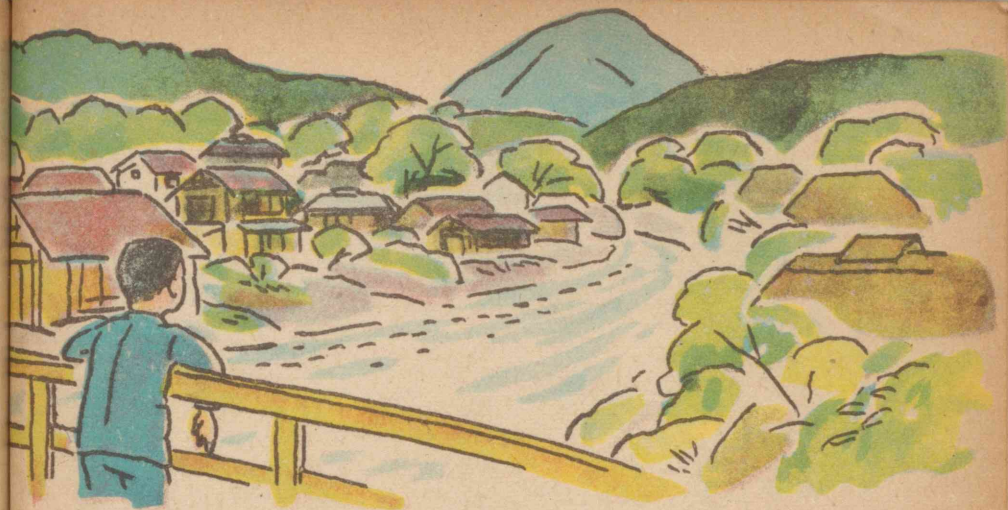
四 人々のために……………77

- (一) 初めての地図
- (二) オランダの少年
- (三) テームズ川のトンネル

学習の仕方
新しいことば
かん字表

……………109





一 谷川の音

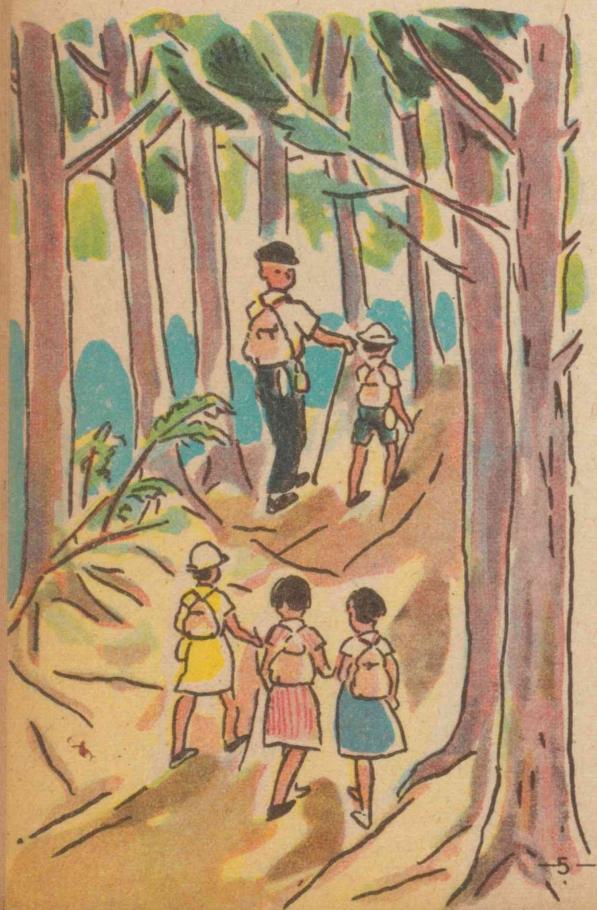
(一) 谷川の音

橋の上に立って川上を見ると、遠くに青い山がそびえています。まさおたちは、いつか、あの山に登ってみたいものだと思っていました。そこへ、大学にいつているひさしのにさんが帰ってきたので、連れていってもらうことになりました。

よく晴れた日曜日でした。

まさお、ひさし、よしこ、みどりがさそいあって、にいさんといいしよに出かけました。山のふもとの駅まで汽車でいって、そこから登り始めました。

太いすぎの木のならんでいる坂道を登っていきました。すぎのなみ木を通りぬけると、まつの林になりました。まつの林で、つくつくほうしが鳴いていました。坂道はだんだんけわしくなっ



きました。

先頭のいさんがふりかえって、

「だいじょうぶかい。」

と、わらいながらいいました。

「だいじょうぶですとも。」

みんなは元気に答えました。

山はぞう木林になりました。ぞう木林のあちこちに、すぎやもみの木が、どっしりとえだをはっていました。道はせまくなって、いつそうけわしくなってきました。小鳥がきれいな声で鳴いていました。

みはらしのきく所で、リュックサックをおろして休みまし

た。すずしい風がふいています。

遠くの方で、水の流れる音がしていました。

「谷川の音じゃないかしら。」

よしこがいますと、

「そうだよ。この山をこすと谷川に出るんだ。そこからは谷

川にそって登っていくのだ。大きな

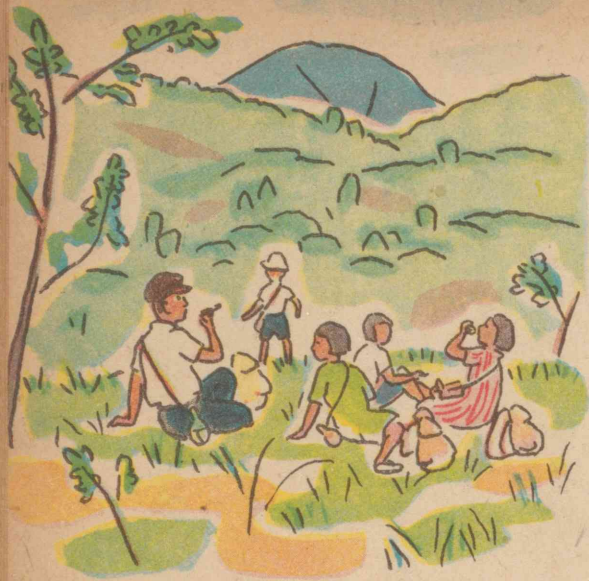
たきもあるぜ。」

と、いさんがいいました。

「うれしい、早くいきましよう。」

と、いって、みんなは立ちあがりました。

ぞう木山をこすと、谷川が見えてき



ました。きれいな谷川の水が岩を
かんで流れていました。谷川の音
は山にひびきわたっていました。

岸にそって、道は山のおくへ、
山のおくへとつづいていました。

よくしげっているかえでの葉をとおして、日は緑色の光をふ
りそそいでいました。

にいさんは、

「今は、こんなにやさしい流れをみせている谷川だけれども、
いぎ、大雨がつづいたとなると、急にあばれだすのだよ。

去年、この山のおもとの村を、水びたしにしたのも、この

川のしわざなのだ。」

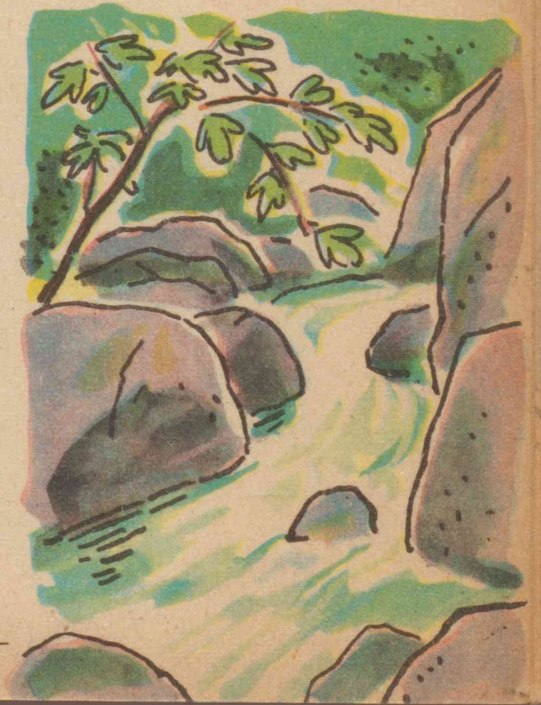
といました。

「へえ、この谷川がですか。」

まさおたちは、しばらく立ちどまって谷川をながめました。
水は岩と岩との間をすべって、こおどりするように流れてい
ました。そして、ところどころによどんでは、深いふちにな
ったりしていました。

「大きな魚がいそいだなあ。」

などと話しあいながら登っていくと、谷川の上の方で、人の
話し声が聞えてきました。話し声にまじって、石をきざむの
みの音が聞えてきました。なんだろうと思って、急いで登っ





って何やら話しかけていました。
あとで、にいさんが、

ていってみると、さかんに工事を
していました。
大きなダムを造っている工事
のようでした。
にいさんが、
「これが、いつか、新聞でみた
新しいダムだな」
と、ひとりごとをいいながら、
働いている人たちのところにい

「このあたりは、岩山と岩山との間がせまくなっているので、
それを利用して、石がきで水をせきとめようというわけだ。
この工事ができあがると、新しい大きな湖ができて、谷川
には、きまった量の水しか流れ出ないということだ。その
上に、発電所も造る計画だつて。」
と、話をしてくれました。

さらさらと流れる谷川の音にまじって、カッチン、カッチ
ンと石をきぎむのみの音が山にひびいていました。町から遠
く見える、青い山のおくに、このような新しい工事がすすめ
られているのでした。
「さあ、出かけよう。もう少しで、たきのところに出るよ。」

にいさんの声にはげまされて、まさおたちは元気に歩きました。

木の根が重なり合つて、はしごのようになってゐる坂道を登ったり、足がすべりそうな所は、岩かどや木のえだにつかまったりして登っていききました。

道は、いつのまにか谷川の岸を遠くはなれていきました。そして、また、ひとつの山をこしました。

しばらくして、どうどうと水の落ちる音がしてきました。

たきが近づいたというので、われさきにと登っていききました。

「やあ、たきだ、たきだ。」

まさおたちは思わずさけびました。木の間から、たきの水

が白く光って見えていました。

岩山の間から、水がふきだすように流れ落ちていました。

たきつぼのあたりには、もうもうと水けむりがたっていました。近くの岩にこしをかけてたきをながめました。

「このたきが、さっきの谷川になるのですね。」

「このたきの上は、どうなっているのでしょうか。」

「上流までいってみたいな。」

などと、話しあっていると、

「山の上に登ると、それがみんな見えるよ。」

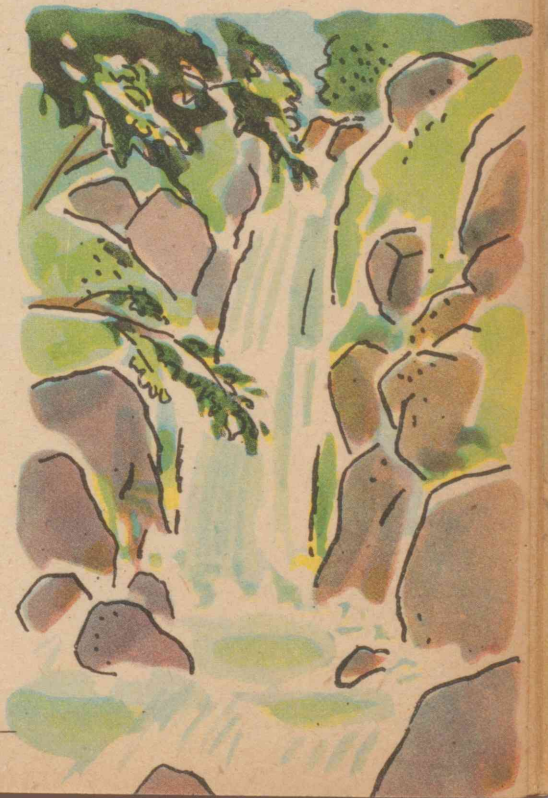
と、にいさんがいいました。

また、山を登りました。道は、ますますけわしくなりまし

た。そして、右に折れたかと思つと左にまがりました。大きな木は、だんだんなくなりしました。あせを流しながら登りました。みどりがつかれたので、にいさんに手をひいてもらいました。どうどう、山のいただきに登りつきました。遠く、けしきがひらけて見えました。

「ばんざあい。」

ひさしがさけびました。みんなもさけびました。「いいけしきだなあ。」



みんなは草の上にすわって休みました。まさおたちの町が、小さく見えていました。谷のようすがよくわかりました。谷が集まって、さらに大きな谷になっていました。今、登ってきた谷が一番大きな谷でした。

山のむこうは、やっぱり山でした。高い山でした。

「おうい。」

みんな声をそろえてよんでみると、遠くで、「おうい」と、こだましました。山の上は、青い、深い空でした。



(二) あらしの日

午後の学習が始まろうとしたとき、急いで教室にはいつてこられた先生が、

「きょうは、これでやめます。帰るしたくをしなさい。」とおっしゃった。

―― 台風がくる。

私はすぐそう思った。ゆうべから、ラジオがしきりに、台風の近づいていることを報じていたからである。そのことが心配で、けさからおちついた気持ちになれなかった。

帰るしたくがすむと、先生は、

「みなさんも知っているように、いよいよ台風がやってくるのです。今、けい報が発せられました。午後三時すぎ、本土に上陸し、北々東に進んで日本海にぬけるらしいということです。この地方は夕方からあらしになるでしょう。」とおっしゃった。

私たちは急いで家に帰ることになった。まさおさんたちと連れだって、大急ぎで帰ってきた。

空はどんよりとくもっていたが、たいした風もなかった。なみ木の葉が、にぶい光をちらちらさせているだけで、数時間後に台風がくるなんて信じられなかった。



「おかあさん、台風がくるんですって。」

私は家にはいるなり、大声でさげんだ。

「そうよ。早めに夕飯のしたくをしましよかね。」

母も心配そうに、急いではり仕事をかたづけた。

まもなく、父も帰ってきた。父は庭のダリヤに支柱を立てたり、コスモスをなわでかこんだりした。弟も心配そうな顔をして、遊びから帰ってきた。私が母の手つだいをすると、弟もじつとしていられないらしく、父のそばにいつて、なわを運んだりして手つだっていた。

空はだんだんあやしくなってきた。まっ黒な雲が、何かに追いたてられるように走ってくる。みるみる、あたりがうす

暗くなっていく。ちよつとの間、あたりがしんと静まりかえる。今までさわいでいたすずめも、いつのまにか、すっかり

すがたを消してしまった。

「いよいよ、やってくるな。」

父が空をあおいでいった。

やがて、大つぶの雨が、ぽつぽつと屋根をたたき始めた。と、みるまに、ごうっとうなりをあげて風がふきつけてきた。

「ろうそくの用意はいいか。」

停電にそなえて、父が注意をし

た。私は、すぐ、ろうそくとマッチをそろえておいた。

弟は、まどにもたれて心配そうに外をながめていた。

夕飯の用意ができた。火の用心のために、かまどの火は念を入れて消した。

早めに夕飯を食べながら、ラジオを聞いた。台風の中心の風速は三十メートルから四十メートルということだった。まもなく、家をゆるがすように大風がふきつけてきた。

「二百十日はぶじだったから安心していたが、やっぱりやってきたなあ。」

「ことしは豊作だということでしたが、この台風ではどうなりますかね。」

父と母が、心配そうに話をしていた。

夕飯がすんでから、私は弟といっしょに、まどから外を見ていた。くれかけた空は、まるですみを流したようだ。木と
いう木は、いっせいにえだをたわめて苦しそうにゆれている。
電線もゆらゆらゆれている。

「ものすごいあらしですね。」

いつのまにか、母も私たちのそばにきて外を見ていた。

雨は、なまり色のしまをえがいてふきつけてくる。まるで、水をたたきつけるようなふり方だ。ひゅうひゅうとうなりをあげて、風と雨はからみあって家のあたりをあばれまわっている。見るまに、となりの庭の青ぎりのえだが、ぎっとさけ

て、私のうちのかきねにたおれてきた。

「わあ、こわいなあ。」

弟が声をあげた。

電燈がぱつと消えた。

すぐ、用意のろうそくをともした。四人のかげがかべに大ききうつつて、ほのおがゆれるごとにゆらゆらと動いた。夕飯のあとで、いつもふざけてさわぐ弟も、こんばんはひっそりとしている。

「かり橋が心配だから、ちよつといつてみてくる。」

父が外出の用意を始めた。父は、大川橋の工事を気にかけているのだ。母は、

「こんなあらしの中を——」。

と、いかにも心配そうだった。

「この町にとって大事な橋だ。じつとしてはいられない。」

父は、雨がっぱに身をかためると、かい中電燈をポケット

に入れて出かけていった。

あらしはいっそうはげしくなってきた。何も手がつかないので、私たちは早くやすむことにした。橋を守っている父のことを思うと、ねているのがすまない気がした。

風がはげしくふきつけてくること



に、物置の小屋のとたん屋根が、ガパン、ガパンと大きな音をたてた。

よく朝になっても、父のねどこはゆうべのままだった。

私は、朝早く、父のところへべんとうを持っていった。

あらしはだいぶおさまっていた。町のなみ木が四五本たおれ、ふきちぎられたかんばんが道ばたに横たわっていた。

かり橋はぶじだった。しかし、水が出てくるのはこれからだそうだった。

父は、町の人々といそがしそうに働いていた。

橋の下をにぎった水が、うずをまいてごうごうと流れていた。

(三) 四品の人

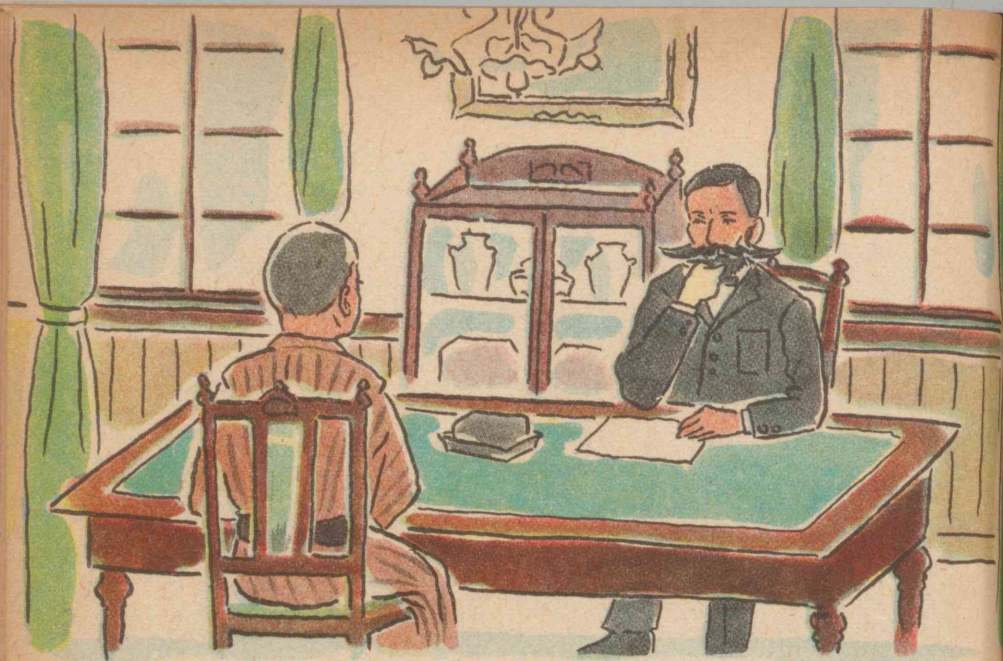
明治十年、夏のある日のことでした。

大臣室の大久保利道の前に、そまつな着物をつけた男がこしをかけていました。

「天龍川の治水工事について、わしに願ひごとがあるのとこののだが―」

大臣は、長いひげをしごきながら問いかけました。

「はい。あの川の治水工事をいたしませんと、川すじ百十数か村の人々のくらしがたちいかぬのでございます。」



男は話をきりだしました。

「力のない者でございますが、協力社というものを起しまして、わたしがおもになって治水の仕事にあたっています。が、入用な金がいま集まりません。」

大臣はだまって聞いています。

「さればといって、この工事を中止すると、たくさんの方々が苦しまなければなりません。つきましては、政府の方から、なにぶんのお助けがいただけないものかと、お願いにきたのでございます。」

「うむ。」

「いかがでございませう。」

「事情はよくわかった」

大臣はじつと考えています。

「では、お助けくださるでしょうか。」

「残念ながら、それはできぬことだ。」

「なぜでございませう。」

「治水工事の必要なのは、天龍川だけではいからだ。あの川、この川の治水工事を助けてやるとなるど、たいへんな金があることになる。今の日本は、ほかにいろいろ金のかかることがあって、どうて

いそこまでは手がでないのだ。一気のどくなことだが。」

男は、大臣の顔をじっとみつめていましたが、

「それはよくわかっていきます。しかし、わたしは、人々の苦しむのを平気でみているわけにはいきません。」

と、きっぱりとした態度でいきました。

「わたしには、かなりの財産があります。これまでも治水のために、ずいぶん出してまいりましたが、この際、全部を投げだしてお国のためにきふをいたしますから、工事のためにお使い願ひとうございます。その代り、政府の方でも、としいかけた時、大臣はそれをさえぎっていいました。」

「あなたは、ほんどにまるはだかになれるか。」

「はい。あなたが一身を投げだして、国のためにお働きになつているのと同じでございます。」

「うむ。」

大臣は、しばらく目をつぶっていました。

「よろしい。あなたの意気ごみが氣にいった。」

と、いきました。

「では、お聞きとどけくださいますか。」

「この大久保が承知したと申したら、それでよかろうか。」

「ありがとうございます。」

男は、感げきのなみだを光らせながら大臣室を出ていきました。

この男こそ、後に、天龍川の川すじの人たちから、恩人としてよばれた金原明善きんばらめいぜんでした。明善は、大臣が承知してくれなかつたら、死ぬつもりで東京にきていたのでした。

「いかがでございましたか。」

宿に帰ると、妻は走り出てきてたずねました。

「うむ、助かった、助かった。」

ふたりは手をとりあってなきました。そして、どんなことがあっても、この工事を完成しようと思ひかいました。

全財産を投げだしたので、人々は、

「金原は気がくるったのだ。」

と、うわさをしたほどでした。

静岡県の県ちようから、治水工事を助けるための金が、毎年おりにくくなりました。

これがきっかけとなって、協力社の方にもたくさんのお金が集まってくるようになりました。

一文なしになった明善は、いつも貧しい身なりをして、工事のさしずみに当っていました。

そのころ、明善の持物といえは、ふろしき一まい、手ぬぐい



一本、わらじ一足、それに、すりへったげた一足だけであつたということです。

それで、人々は、明善に「四品の人」と、あだ名をつけたほどでした。

「四品の人」は、そのすがたで、県ちようにも、政府にも出かけていきました。

早く仕事をしあげるために、明善は、朝早くから川岸に立つて働きつづけました。

今になつても、人々は天龍川の流れる見るごとに、明善の働きを思いださずにはいられません。

二 海に生きる

(一) なぎさ

なぎさ

なぎさのすなは、

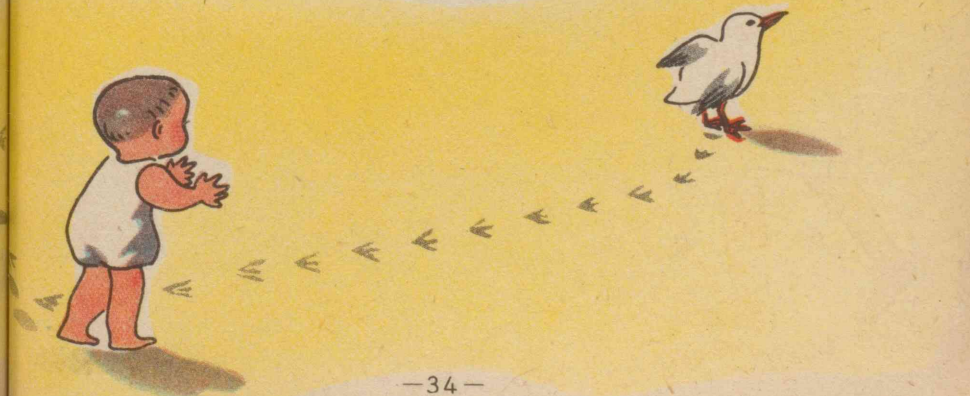
ふるいにかけてたよりにきれいだ。

だれもない。

すなの上には、

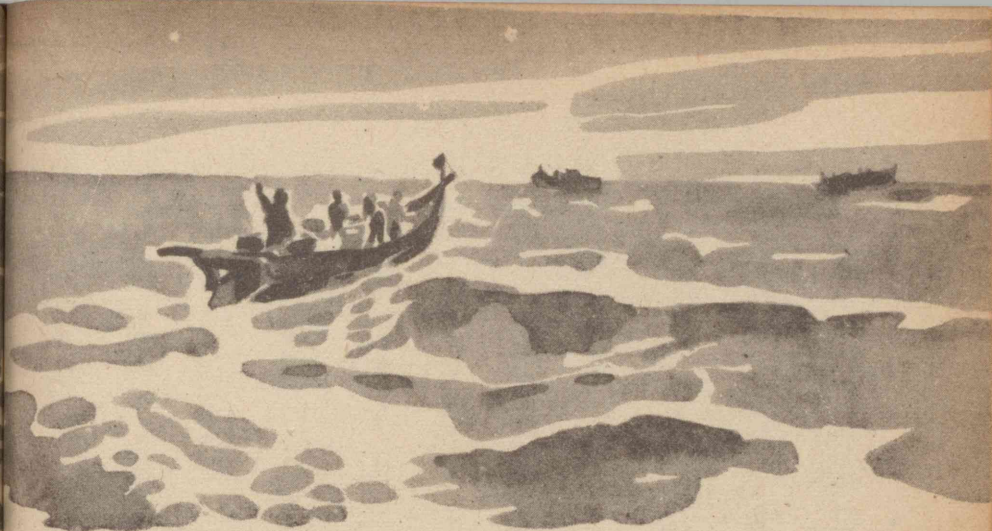
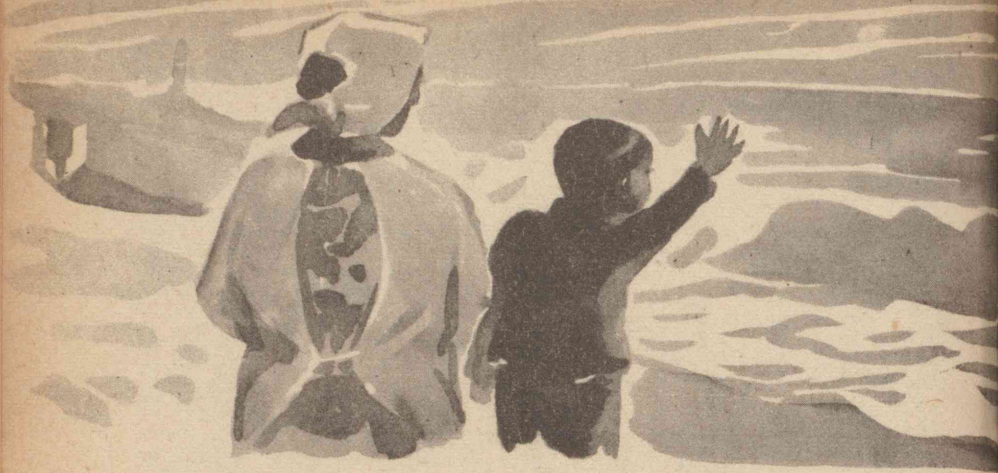
小さな水鳥の足あとがある。

それが、遠くまで
ならべたようにつづいている。
その足あとをふんで、
これもまた、
かわいいあかんぼの足あとがある。
きつと、
その水鳥を
つかまえようとでも思って、
よたよたと出かけたのかもしれない。
だが、水鳥とあかんぼ、
それだけか、



それだけとということがあろうか。
よくみまわすと、
おう、そこに、
少しはなれたところに、
これもはだしの足あとがあった。
あかんぼを気づかって、
あとから静かに追いかけた、
それこそ、
そのあかんぼの
おかあさんのであろう。
にこにこした顔まで見えるようだ。





夜あけ

へさきの小旗が、
しお風にはたばたとなつてゐる。

夜明けのおきをみつめていた父が、

「西だ。西風だ。」

とさけんだ。

にしん日よりだ。

「それっ。」

父のかけ声に、

ぼくたちはカいっぱい船をおした。

ざあつと、顔にかかる冷たいしぶき。

すみ絵のような海の上を、

船はみるみる遠くなつていく。

夜あけの星の下で、

ぼくは母といつまでも見送っていた。

北海道の北のはて、

ぼくは、にしんの子どもだ。

大きくなったら、にしんとりになるのだ。

(二) 海べの子ども

ぼうしをのせた一本の竹が立ててある。そのそばにくつがおいてある。だれもない。

しばらくして、海べの村の男の子ーがそ

と出て来る。それにつづいて、男の子(2・3・

4)、女の子(5・6・7)が出て来る。

1 あそこにねているだろう。

あの子だよ、さっき会った

のは。

2 ねむっているのかな。

5 なんてしよう、この竹。ぼうしなんかのせて――。

1 びっくりしたよ、さっきは。だれもないと思っていたのに、そのすな山から、ふいに飛びだしてきたんだ。

3 何かいったかい。

1 いや、何もいわないで、にこにこしているだけなんだ。

4 へんな子だな。どこからきたんだろう。

7 日曜だから遊びにきたのよ。町の人ね、きっと。

2 そんなことはないよ、ひとりで来るなんて。

4 (ぼうしをとって見て) きたがわ・たもつ、四年。――四年生



だよ、あの子も。

1 どの学校だろう。見たことがないな、このきしよ。う。
5 あら、竹のまわりのすなに数字が書いてあるわ、12、3。
3 6に9だね。あやしいぞ、暗号かな。この竹の下に、何かうずめてあるのかもしれない。それとも、ぼうしがのせてあるから、あいつのしるしかな。

2 なんだ。それでは、まるでぼうし陰物語じゃないか。なんでもないよ、こんな竹。(竹をぬく)

1 起きたぞ、あの子。あ、こっちへ来る、こっちへ。

それを聞いて、2が竹をすてる。7が落ちたぼうしをひろい、すなをはらってそっとおく。こわいものでも近づいて来るかのように、後ずさりをする。北川保たもとが

出て来る。保は、だまって竹をもとの所に立てる。

4 きみ、なんだい、それ。

保 日どけいさ。

5 日どけい。それで時間がわかるの。

保 だいたいわかるよ。(すなの上をさして)このくつの所が十二時。これを、初めにじしゃくできめるんだ。反対がわの、そのくつの所が六時。だから、今、かげの落ちている所が、——そうだね、二時半くらいかな。

3 きみ、どこからきたの。

保 四国から。

1 四国。(みんな、びっくりした顔をする。)

保 キのう、ここの水産試験場に着いたばかりさ。
7 あら、では、こんどきた技師さんのうちの人。
保 そう。おとうさんがこっちへかわってきたのでね。
1 それでわかった。へんだなあと思ったよ、きみを。
5 わたしたちの学校にはいるんでしよう。
保 あすからいくよ。
4 ぼくたち、みんな四年生だ。きみ、保くんだね。
保 どうしてぼくのなまえを—。
4 なあに、顔を見ればわかるのさ。
6 ぼうしで見たのですよ。
保 なあんだ。そうか。—ぼく、この海岸、すきになったよ。

1 きみ、泳げる。
保 このくらいの波だったら、試験場までは泳げるだろう。
2 ぼくと同じくらいだな。船はこげる。
保 こぐ手つだいぐらいならできるけど、きみ、うまいの。
2 うまくはないよ。ぼくも手つだいぐらいさ。つりは。
保 おとうさんとよくいくよ。
1 なんでもできるんだなあ。それでは、えーと、すもうは。
保 さあ、きみとしたら、ぼく、負けるかな。してみようか。
4 そうだ。すもうがいい。ぼくがぎょうじだ。きみは、四
国からきたのだから、四国山にしよう。
保 四国山か、いいよ、それから、その人は。



4 そうだなあ。びっくり川。

1 へんだなあ、そんななまえ。

4 だって、きみ、保くんは会って、

びっくりしてにげだしてきたんだらう。

1 (頭をかいて) まあ、いや。

保がうわぎをとって、日どけいの竹で大きく円を書

く。1も うわぎをとって、その円の中にはいってき

て、しこをふむ。みんな、円をとりまいて手をたた

く。

4 (じぶんのぼうしを右手に持って、ぎょうじの

まねをしながら)

東—四国山。西—びっくり川。たがいに

見合って、——まだ、まだ。

保 ちよつと待って。(1に) きみ、どうしたの、それ。(ど、む

ねにつけている赤いセルロイドの円ばんをさす)

1 (立ちあがって) これ、にいさんがとってきたかつおについでいたんだ。

保 かつおに。—見せてくれよ。

(むねからはずして、保にわたしながら) いいだらう。この止めて

あるはり金は銀だよ。

保 やっぱりそうだ。いつ、そのかつおとれたの。

1 八月二十五日さ。ぼくが水産試験場にとどけたので、は

つきり覚えてゐる。

保 これは、四国の水産試験場で、去年つけたしるしだよ。これをつけて放してやると、魚の通る道がわかるんだ。このしるしが、ぼくのおとうさんの試験場のだよ。ほら、ここに番号もあるだろう。ぼくも、これをつけるとき、手つだつたんだよ。

2 (一に) そのしるしを持ってきみが、きたばかりの保くんが一番先に会うなんて、かつおがなかよくさせてくれたようなものだね。

5 きつとそうよ。(みんなわらう)

3 あのおきの、ずっとむこうを、かつおの大群が泳いでいるんだね。

みんなはおきの方を見る。その時、ボンボンと漁船の音がする。

1 あ、船が帰って来る。

1がさけびながらすな山にのぼる。みんなあとにつづく。

4 一そう、二そう、三ぞう、一五そう帰ってきた。

7 おとうさんの船もいる。

2 大漁旗が立っているぞ。

みんな 「大漁旗だ、大漁旗だ。」と、うれしそうにさけぶ。

ボン ボン ボンと、漁船の近くなって来る音。

いつのまにか、保と一がかたを組んでいる。

(三) くじらを追って

わたしは、今、しょうかいされました大西^{おにし}であります。

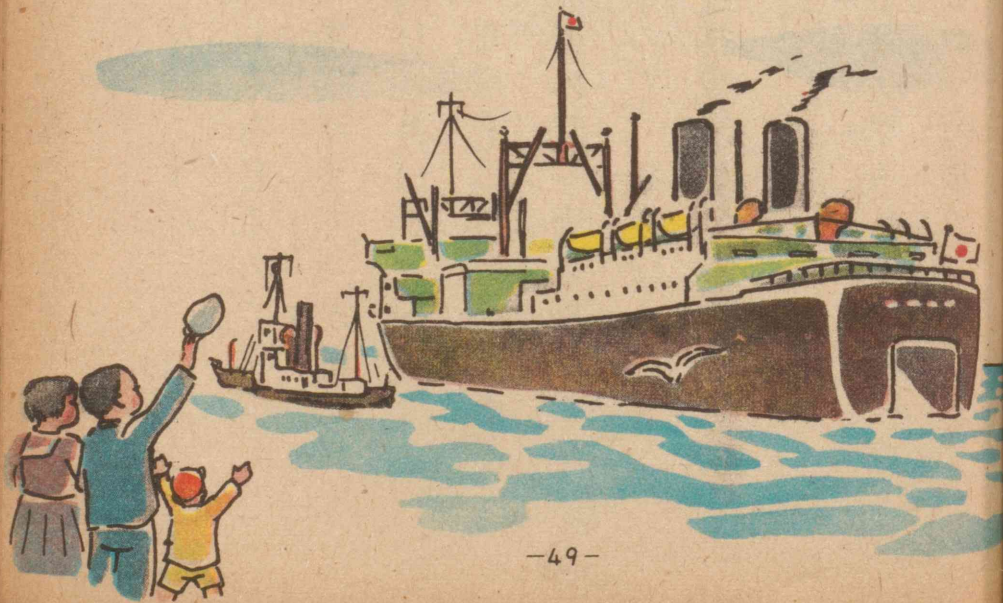
去年の十一月、捕鯨^{ほげ}船の団長として南氷洋へいき、この春、
ぶじ、仕事をすませて帰ってまいりました。

ここの校長さんは前から親しい友だちで、こんど、ぜひ、
捕鯨の話をしてほしいとたのまれましたので、ここにまいっ
たしだいです。

くじらは、日本の食りよう不足をおぎなうばかりでなく、
バターやせっけんを作るにも、たいせつな材料となるもので

すから、捕鯨の仕事は、ますますさ
かんにしなければなりません。あな
たがたにも、そのことをよくわかっ
てもらいたいと思つて、わたしの方
からお話にきたようなものです。

さて、このたびの捕鯨の話ですが、
日本の港を出発したのは、十一月六
日、母船以下キャッチャー・ボート、
肉積船、冷とう船など十五せきから
なる船団をつくって出かけました。
キャッチャー・ボートというのは



捕鯨船のことで、三百トンほどの小さな船ですが、これにくじらを追いかけて、捕鯨砲ほうをうってはいくじらをとるのです。

くじらは日本近海に少いので、遠く南氷洋まで出かけていかなければなりません。南氷洋まではひと月ばかりかかりますが、六日めごろから熱帯の海にはいり、十二日めには赤道を通ります。赤道を通るときには、赤道の門を守る神が、門をあけてくれるというつたえ話があるので、船では赤道まつりというのがおこなわれます。ここをすぎると、船は南半球にはいるわけです。

そのうちに、南十字星がはっきりと見えてきます。南十字星というのは、南極をさし示している四つの星で、ほんとうに清らかな気持がします。

南緯四十度の線をこえますと、海がたいへんあれてまいます。文字どおり山のような波がおしよせ、波のみねが強風にふきちぎられて、白いたてがみのようです。船は、今の山のいただきに乗りあげたかと思うと、たちまち、深い谷底に落されてしまいます。初めは、気持も悪いし、おそろしい気もしました。けれども、なれてしまえばけっしてこわいものではありません。波と戦って、めざすところにぐんぐんつき進んでいくのは、じつに勇ましいものです。

やがて、氷山が見えだします。陸地のような大きな氷山が、白夜の中にうす青くうかんでいる風景は、おどきの国のよう

に美しく、あなたがたにも見せた
いと思います。

目的の漁場に着いたのは十二月
七日でした。

六せきのキャッチャー・ボート
は、さっそく、あちこちに別れて
くじらをとりにかかりました。

やぐらの上には見はり番がいて、
くじらをみつけます。くじらはしおをふくので、遠くからで
もそれをみつけることができます。

ふきあげるしおの、高い、低い、その形などによって、く
じらの種類もわかります。「白ながす」というくじらは、十五メ
ートルも高くしおをふきますが「ながす」になると十メートル
より高くはふきあげません。

くじらがみつかり、見はり番は伝
声管で、かじをとる人に知らせ、船を
ぐんぐんくじらに近づけます。

砲手は、手をあげて、「ゆっくり。」と
か、「もう少しはやく。」とかいって、
あいずをします。

くじらも何かき陰を感じるのか、し
おをふいては、すつと水にもぐり、も



ぐつては右ににげ、左ににげして、カいっぱいに走ります。
にがすまいとして、かじをとる人と砲手とが、心を一つに
して追いかけます。ねらいをさだめて、「よし。」と思った時に、
砲手は引き金を引く。

つなを引いて、もりが飛んでいく。大きなくじらに命中。
くじらは、いきなり海にもぐる。深く、深く、もぐる。つ
なをどんだんのばす。

六百メートルほど前方にうかびあがったかと思うと、さか
んにあばれまわる。

・第二のもり、第三のもりをうちこむ。さすがの海の王者も
しだいに弱り、息が絶える。

キャッチャー・ボートは、太いくさりでこれをつなぎ、母
船めがけて帰って来る。

こんどの捕鯨で、最初にとったくじらは、八十五フィート
もある「白ながす」でした。

母船に運ばれてきたくじらは、すべり台にそろそろと引き
あげられます。そこには解剖夫たちが、手に手に大きなほう
ちようを持って待ちかまえています。たちまち、その大きな
くじらのからだは、肉は肉、皮は皮、ほねはほね、油は油と、
二時間もたたないうちに切り分けられてしまいます。

時間がたつほど油の性質が悪くなり、肉もまずくなるので、
できるだけ手早くしまつしなければなりません。とてもたい

へんないそがしきです。しかも、
とれたくじらが、つぎからつぎと
運ばれてきますから、休むひまな
どありません。大きいのなら、一
日に十二頭ほど、少し小さいのに
なると、二十四頭ぐらいまではし
まつすることができます。

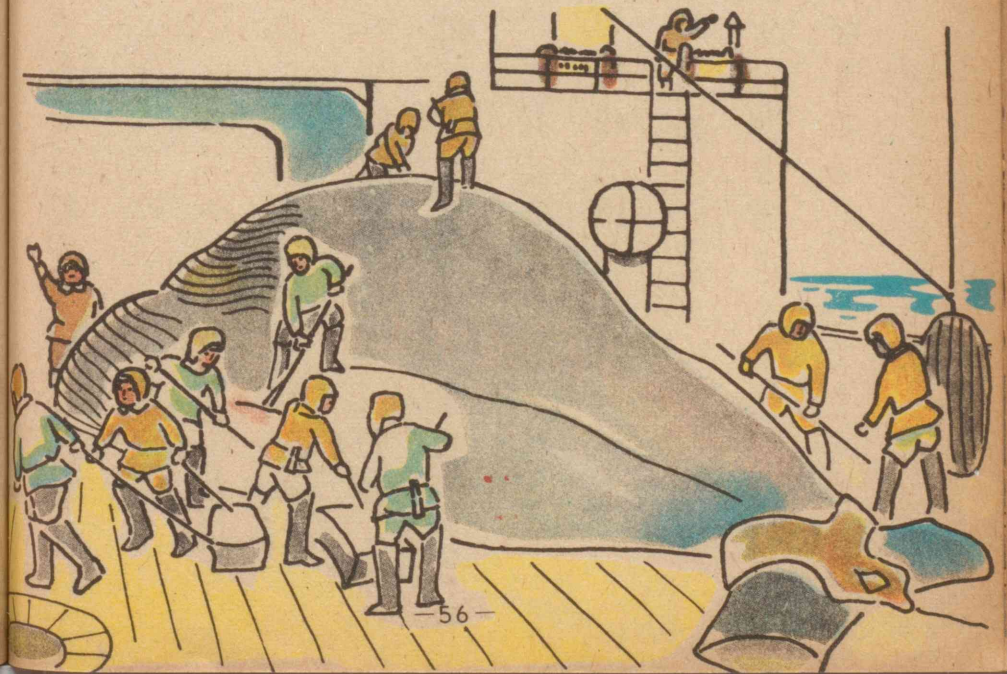
こうして、くじらをみつける、
追いかける、とる、しまつをする、
といったことを百日ばかりつづけ
るのです。

こんどは、八百三十三頭というたくさんのくじらを、おみ
やげにすることができました。

大きなくじらをみつけた時は、みんな大喜びです。
しかし、二頭づれのくじらが、なかよく泳いでいるのをみ
かけた時などは、どうも、これをうちとる気になれません。
また、子どもを連れてくる親くじらには、いっそう、それが
できません。

くじらは海に住んではいますが、馬や牛と同じように、ち
ちで子どもを育てる動物で、子どもをたいへんかわいがるも
のだそうです。

三月十二日、この漁場をあとしめてもとることにしました。



そのころになると、くじらもそろそろいなくなるからです。

帰って来るとちゅうで、きれいなオーロラを見ました。青い光のカーテンが、夜の空にかがやくのです。花火などの美しさは、どうてい、およびもしません。

半年ぶりで日本の海岸にたどりついた時は、さすがにうれしく、緑の島や山が、わたしたちをむかえてくれるように思われました。

わたしの話はよくまとまりませんでした。長い間、静かに聞いてくださって、どうもありがとうございます。

ここに、なんまいかの写真を持ってきてありますから、あとでごらんください。

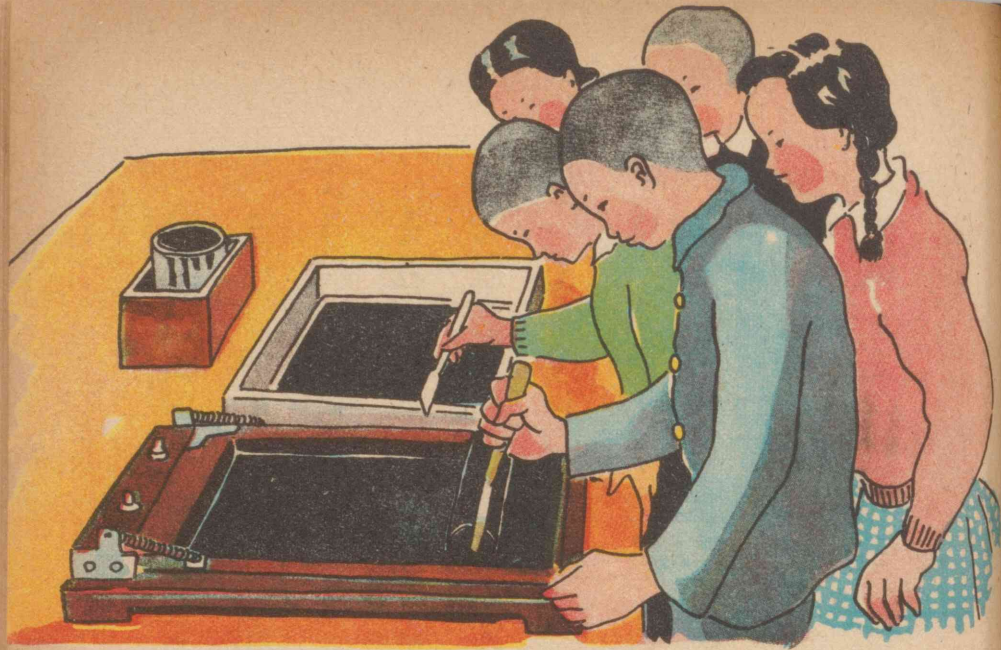
三 展らん会

(一) 案内状

「文化の日」に、学校では展らん会をすることになりました。それで、まさおたちの学級では、おとうさんやおかあさんに、案内状を出そうということになりました。

下書きの文を黒板に書きだして、みんなで話しあいをしました。

いらぬことばを省き、だいなことを書き加えて、文を整えました。



案内状を、どう写ばんで印刷することになりました。
やすり板の上に原紙をのせて、鉄筆で書くのです。なれないのでうまく書けません。
力を入れすぎると原紙がやぶれそうになるし、力をぬきすぎると字がうすくなります。くふうをしながら、いっしょうけんめいに書きました。
書きあげてから、印刷をすることになりました。

「十一月三日の『文化の日』に、私たちの学校では展らん会をいたします。
図画、工作、研究したものなどを展示してお目にかけます。
この春から、みんなで作っている学校博物館も、ぜひ、ごらんいただきたいと思ひます。
おとうさん、おかあさん、どうぞおいでください。
おうちのみなさんもさそっておいでください。
では、お待ちいたしております。」

みんな集まって、それを見ました。

まず、原紙をどう写印刷機にはりました。しわがよらないように、ぴんとはりました。

それから、原紙の字がうまく写るように、わら半紙に合わせて位置をさだめました。ねじでしっかりとおさえて、ずれないようにしました。

ローラーのインクがむらにならないように、インク台の上をころがして、よくなすりつけました。印刷機のはしをしつかりとおさえて、原紙の上にローラーをすべらせました。

原紙をあげてみると、字がくつきりと写っていました。みんなが、「わあ。」といって喜びました。

(二) 展らん会

展らん会の日には、朝からたくさんの人たちが見に来てくれました。おとうさんやおかあさんたちのほかに、卒業生の方たちや、近くの学校の友だちもきてくれました。

教室のかべには、今までに作ったかべ新聞や、図画、調べたもの、図表などをはっておきました。

その下につくえをならべて、工作の作品、作文集、日記、研究記録、集めた物、はい物利用の作品、自治会記録などをならべておきました。

「そよ風」は、第一号からそろえてはりました。

図画で一番よくできているのは、けんきちの風景画でした。かきの木に物ほしぎおがかけてあって、せんたく物がほしてある絵でした。葉の落ちたかきの木には、赤い実がなっていました。秋の絵だということですが、すぐわかりました。

油絵のように、べつとりとぬりつけたクレパスが、ところどころナイフでけずり落されていたり、ずいぶん苦心をしたあとがみえていました。

調べたものの中では、てつおの建物調べがめだっていました。この町の、いろいろな建物を調べて、その形を書き、古い順にわかりやすくならべてありました。古い神社やお寺の建物から西洋館などまで、二十ぐらい調べていました。

屋根の形や、材料などもくわしく書きこんでありました。工作では、まさおのトラックがよくできていました。ゴム



ひもをまいて放すと、トラックが走りだすしかけがしてありました。

研究記録では、さだおの「か」の研究がすぐれていました。

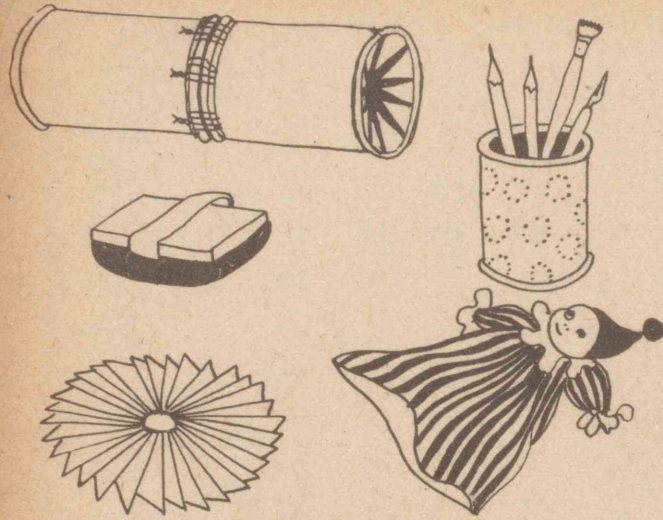
八月六日から二十二日までかかって、かがたまごを産むところから、たまごがかになって飛びだしていくところまで観察した記録でした。

「バケツに雨水をためて、うき草を入れておく。―かがきてたまごを産む、その産み方やたまごの性質。―ぼうふらにかえる。―コップにうつして育てる。―一回、二回、三回、四回、と皮をぬいで、おにぼうふらとなる。―とうとう、かがその中からぬけだして飛びたっていく。」

その順序がよくわかるように、日づけや時こくも、きちんと書きこんでありました。虫めがねで調べて、その一つ一つの形や色なども書いてありました。

はい物利用には、ずいぶんおもしろい物がたくさんありました。

古いはがきで作ったどびんしき、かんづめのあきかんに色紙をはった筆立、古いくつしたにぼうぎれを入れて作った黒板ふき、新聞紙の紙きれをなんまいもはりつけて作った指人形など、いろいろありました。



中でも、よく考えたと思うのは、よしこの『ねずみとり器』で
した。

かんづめのあきかんの底を、星の形に切って、きざきざを
内側に折りまげ、もうひとつのあきかんと口のあいている方
を合わせて、はり金でとじたものでありました。

その中に、ねずみのすきな物を入れておくと、ねずみは知
らないではいる、はいつたらきざきざがあつて出られないと
いうわけです。

見に来た人たちは、あとからあとからと教室にはいつてき
ました。

「よく書けているなあ。」

「たいへんな努力ですね。よく調べていますこと。」

「まあ、うまいことを考えたものですね。」

人々は、口々にほめてくれました。

学校博物館も、たくさんの
人でした。

おもに上級生の人たちの力
でできたものですから、展示
してある物も、ずいぶんりっ
ぱでした。

この町を中心とした、大き
な模型地図がかけてありまし



た。

この地方でできる産物の標本や、図表や、温度、雨量をはかったグラフなどもありました。

共同して研究したり、調査したりしたのも、たくさんありましたが、けいことまさおとで作った「ゆうが燈とこん虫」が、人目をひきました。

ゆうが燈の模型をけいこが作り、ゆうが燈に集まってくる虫を分けて、標本にしたのはまさおでした。姉と弟が、共同して出品したのはこれだけでした。

各教室に展示してあるものの中から、参考になるものは、あとで学校博物館におさめられることになっていきます。

(三) ぼくのトラック

ぼくは、展らん会にトラックを出した。

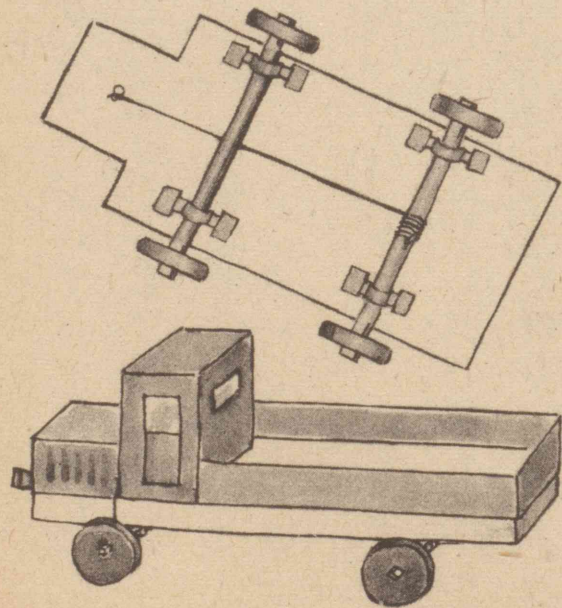
みんなの作品とならべてみると、たいしてめだちもしなかった。しかし、ぼくはずいぶん苦心して製作したのである。

最初の計画では、もっと気のきいた、流線型の自動車にするつもりであったが、問題は、「どうして車を動かすか」にあるのだから、車体の作りやすいトラックにした。

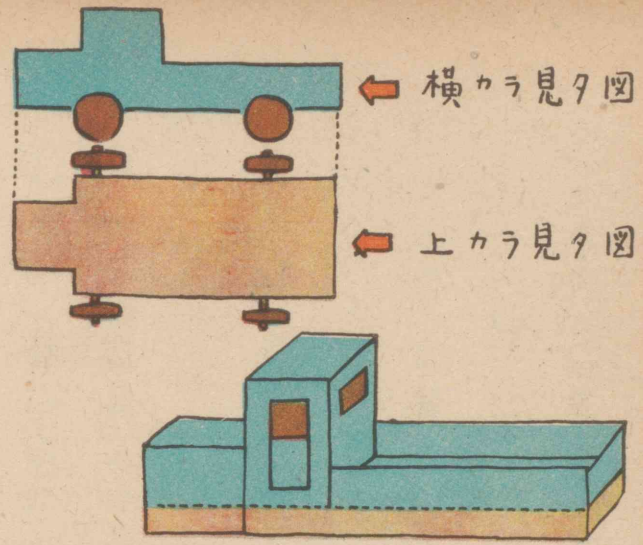
まず、ぼくは設計図を書いた。

できあがる車体の大きさや、それに使う材料のことなどを

てみるとずいぶんあるものだ。
 車体の底板にする板きれは、しっかりとしたものかほしい
 と思った。さがしてみたがいものがない。おかあさんの買
 ってきたかまぼこの板がちょうどよさそうなので、それをも
 らうことにした。
 車体の上部は、その板に厚紙を
 はりまわし、色紙をはりつけられ
 よいのだからわけはない。苦心は
 下部の製作にあるのだ。車輪は、
 ねん土を平らにのばしてまるく切
 りとって作った。中心にきりを立



設計図ができたので、材料と道具を集めにかかった。
 ねん土・板きれ・わりばし・厚紙・色紙・のり・ゴムひも
 ブリキ・糸・小がたな・はさみ・ものさしなど、数えあげ



考えに入れながら書いていった。
 だいたいのことは頭の中にえがいて
 いたはずであるが、いざ、じつさいに
 寸法を入れながら書いていくと、そう
 やすやすとは書けなかった。
 作文と同じようなもので、細かな部
 分になると、書いてはなおし、書いて
 はなおししなければならなかった。

て、車輪の半けいの長さの糸を結びつけておいて、その先にゆわえたブリキをぐるりとまわして切るのである。

ぼくは、失敗した時のことを考えて、車輪は余分に作っておいた。

まるくけずったわりばしを車じくにした。それを、ねん土の輪が、まだ、やわらかいうちにさしこんでおいた。後の車じくには、ゴムひもをひっかけるために、ちく音機のはりを打ちこんでおいた。

車輪がかたまってから、ブリキを切って、それで車じくを上部の車体にとりつけることにした。ここが一番むずかしいところである。

ブリキを切ったり、車じくがブリキの中でまわりやすいようにそれをまるめたり、ブリキのはしを紙どのりで上部の車体にはりつけたり、ずいぶんほねがおれた。

やっと、トラックの形ができあがった。

ゴムひもの一方のはしを、上部の車体の前の方に、動かないように結びつけておき、一方を後の車じくのはりにひっかけて、車輪をまわしてゴムひもをまきつける。そのトラックを、ゆかの上にそっとおいて手を放すと、トラックが走りだすというしかけである。

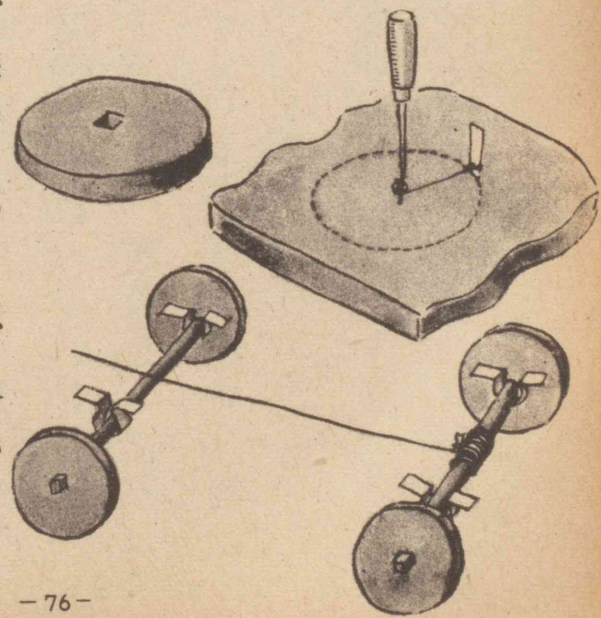
ぼくは、むねをどきどきさせながらやってみた。トラックはちよつと動いた。が、すぐ止まってしまった。

調べてみると、車じくがフリキの
つき目にはまりこんでいた。

そこをなおすと、車輪と車じくの
間がゆるんだり、全体の平均がとれ
なくなったりして、なんどもやりな
おさなければならなかった。

しまいには投げだしたくなかったが、思いなおして、根気よ
く製作をつづけた。急いでするのが、一番いけないことだと
思った。毎日、手をゆるめなくて少しずつ仕事を進めた。

トラックができあがって、するすると走り出した時、ぼく
は思わず、「ばんざい」をさげんだ。



四 人々のために

(一) 初めての地図

五十才をすぎて学問に志し、

星の研究から、

地上に、正しい位置の定められることに気のついた
伊能忠敬いのうただたかは、

それをもとにして、地図を作ろうと思いたった。

しかし、日本に初めてのこの計画には、

それに必要な機械さえなかつた。

——苦心の日はつづいた。

やがて、かれがその機械を完成したとき、

すでに五十六才になっていたが、

一步一步の足うらに、

大きな希望をふみしめて旅に出ていった。

北は北海道から、南は九州まで、

みさきをめぐり、

島にわたり、

湖をこぎ、

山にのぼり、

昼は土地の測量に、

夜は星の観測に、

十八年間の心血をそそぎこんだ。

ただ、ひとすじ、

世のため、人のため、

忠敬は日本全国を歩きまわり、

ついに、

国土の形を、

初めて紙の上にとどめることができた。



(二) オランダの少年

「おや。」

海べのどての上を歩いてきた少年は、水門のそばにきて立ち止まった。水音が聞えていたからである。

オランダの国は海面より低いので、大きなどてで海の水を防いでいるのだ。

八つになったばかりの少年であったが、どてのたいせつであることはよく知っていた。

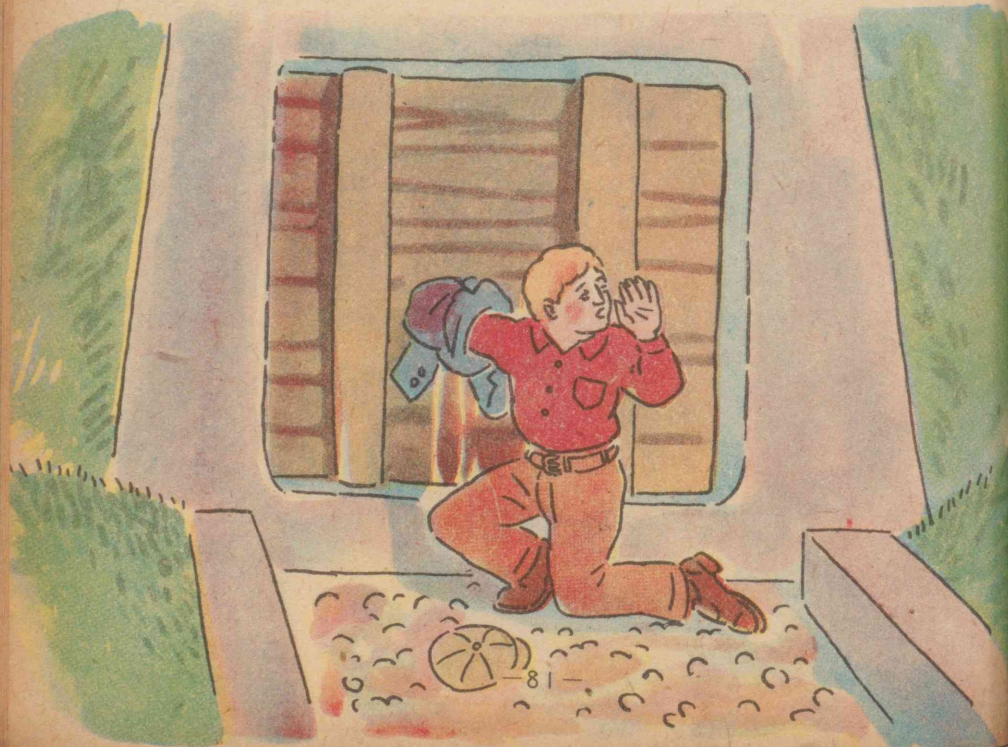
少年がどてをかけおりていってみると、水門の所から海の

水がもれてゐるではないか。

水門の材木に小さなあながあいていて、そこから水が流れ出していた。材木はくさっているどみえて、水の勢いにつれて、あなはだんだん大きくなっていった。

「たいへんだ。」

少年は大きな声でさけぶと、じぶんの着ていた服をぬいで、急いでそのあなをふさいだ。



けれども、それだけではすぐまにあわなくなってきたので、
こんどは、じぶんのうでに服をまきつけて、そのあなをふさ
ぎにかかった。

やっど、水のもれるのは止まった。

「だれか通らないかなあ。」

少年はあっちこっち見まわしたが、だれも通りかかる人は
なかった。

そのうちに、日はとっぷりどくれてしまった。

少年は、どうしていいかわからなかった。

「だれかきてよう。たいへんだあ。」

と、大きな声でなんどもさげんだ。

けれども、どてのむこう側で、どどーんと波の音が聞える
だけである。

「いまに、だれか通るかもしれない。」

少年は、なきたくなるのをがまんして、水門のあなをおさ
えつづけていた。

夜はだんだんにふけて、あたりはまっ暗になってしまった。
冷たい海の水がうでにしみてきて、うではこごえたように動
かすこともできなくなった。

空には、星がふるように光っていた。

少年は、とうとうなきだしてしまった。なきながら、水門
のあなをしつかりとおさえつづけていた。

おなががすいてくる上に、うでの冷たさが全身にひろがってくる。服をぬいでいるので、からだがかたがたとふるえてきた。

「このどてが切れたら、オランダの国はたいへんなことになるのだ。」

おとうさんのことばを思いだして、少年は齒をくいしばってがまんしつづけた。

そのうちに、気が遠くなってしまった。

少年は、どこかで、じぶんの名をよんでいるような気がした。かたをゆすぶられて、少年ははっとして気がついた。夜はしらじらとあけかかって、あたりがうすぼんやりと明るくなっていた。

見ると、ひとりのおぼろさんが立っていて、
「気がついたかね。」

と、やさしくたずねた。

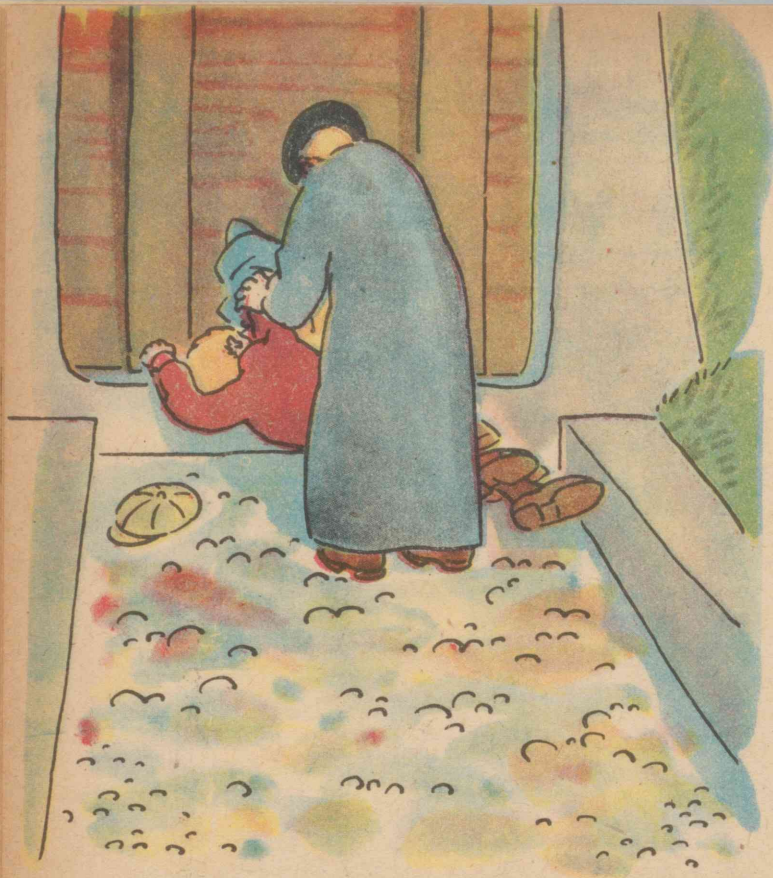
「は、早くー。」

「どうして、そんな所にしゃがんでいるの。」

「ぼくは、ぼくは、海をささえているんです。」

「なんだって。」

「ここにあなたがあいてい



るんです。ぼくが、うでをぬくと水があふれてくるのです。」

「それはたいへんだ。」

おぼうさんは、大声をあげて近くの人々を集めにいった。みんな大急ぎでかけつけてきた。

水門のあなは、しっかりとふさぎとめられた。

もし、このひとりの少年がいなかったら、どうなったであろう。小さなあなが大きくなり、どんな大事になったかしかない。

少年の細いうでによって、オランダの国、オランダの人々が救われたといっても、いいすぎではない。

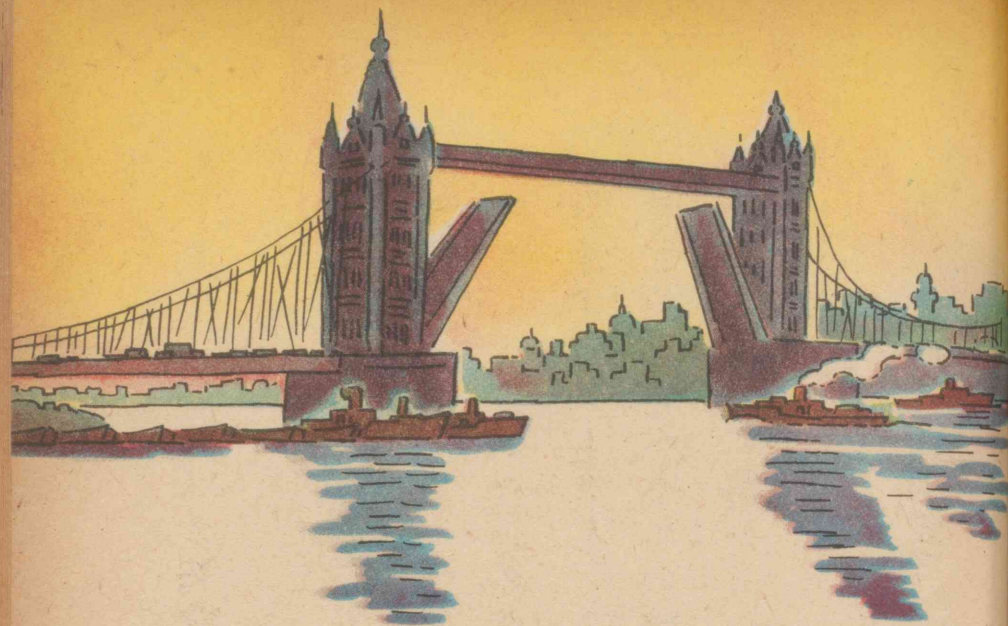
(三) テームズ川のトンネル

(二)

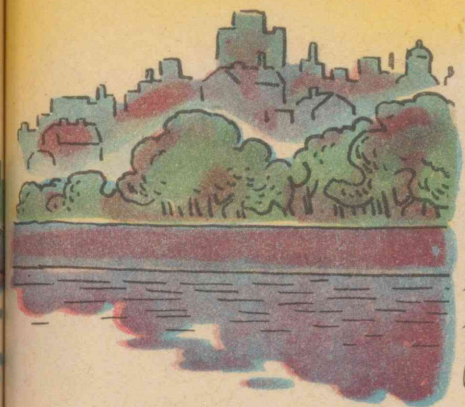
イギリスの首都、ロンドンの町の中を、テームズ川という大きな川が流れています。今は、川の上には有名な開閉橋（開閉橋）がかけられていますし、川の下にも、りっぱな通路があって、交通にはなんの不便もありません。

しかし、今から百五十年ばかり前には、人々は、船で往来していました。

むかしから、ロンドンはいきりの深い所として知られています。



進歩していませんので、まるでぐ
らのように、土にもぐってほって
くよりほかありませんでした。わ
ずか三十メートルばかりのあなを
ほり下げるのに、一年もかかっ
たくらいでした。
それでも、四年目になりますと、
たてあなは予定のとおりできあ
がって、横あなもだいたいほり
進められていました。その間、
なんども川水がはいってき
たり、岩や石が落ちてき



すが、テムズ川にたちこめるきりのために、しばしば船が
しょうとつして、悲しい事故さえひきおこしました。ロン
ド
ンが、大都市として発達していくので、水上の交通もはげ
しくなり、交通がはげしくなるにつれて、しょうとつの事故の
数も増すばかりでした。

それで、人々はどうにかして、テムズ川の下にトンネル
をほりたいものだと思っていました。
が、一八〇二年、とうとうその計画
ができあがって、実行にとりかかる
ことになりました。

そのころは、工事の方法も機械も

たりして、なんんかの命がうばわれると、いうような事故がたびたびありました。

ある大風雨の夜のことです。ほりかけのトンネルに土くずれがおこって、あつという間に、川水がどつと流れこんでしまいました。五年間の苦心と、とうとい人の命と、たいへんな資金が、たちまち、どろ水の中にのまれてしまったのです。マーク・ブルネルの姉の夫が、にげまどう人々を救おうとして、勇かんに働いて、ついに命をささげたのはこの時でありました。

(三)

兄の急死が知らされたとき、姉とマーク・ブルネルはだきあつてなきました。

一家をささえてゐる柱を失つて、これから先、ふたりはどうして生きていけばよいか、わかりませんでした。

そう式をすませて帰る道で、ブルネルは、

「ねえさん、ぼくがいつしゅうけんめい働きますから、どうぞ安心してください。」

と、いつて姉をなぐさめました。

すると、姉は弟をみつめて、しっかりした態度で、ブルネルの思いもつかない大計画を語り聞かせたのでした。

「マークよ、悲しみにうち勝つていきましよう。これから、

大きな仕事をして、悲しみを喜びにかえましよう。あの人が命をかけてやった、あの大事業を完成しようではありませんか。」

「そうです。ねえさん、やりましよう。」

ブルネルはさげびました。

「そのためには、安全に土をほることのできる機械を発明しなければなりません。」

「はい、やってみます。ぼくは、どんな苦しさにもうち勝ってやってみます。」

ブルネルは、姉の手をかたくにぎりしめてちかいました。

それから、ブルネルはむちゆうになって、この発明にとり

かかりました。

しかし、ブルネルは賃金を得るために、昼は工場にいつて

働かなければなりません。

夕方、家に帰って食事をとる

と、すぐ研究にとりかかるので

したが、なかなかいい考えがう

かんできませんでした。図面を

ひいたり、模型を作ったりして

いるうちに、夜が明けてしま

くともありました。それで、ブ

ルネルのからだはだんだんに弱



って、病人のようになりました。

いつも弟をなくさめはげましている姉も、これを見て、

「マークや、少し休んだら、どう。」

と、忠告することもありました。

「ああ、早く、この機械を発明しなければ——。」

思わずつぶやくブルネルの目の前には、水をいっぱいにたたえて流れる大チームズ川がうかんでくるのでした。

(三)

ブルネルはつかれを休めるために、よくさんぽをしました。さんぽは、いつもチームズ川のほとりにきまっていました。

ある秋の夕ぐれのことでありました。きりがチームズ川の上になちこめていました。

ブルネルは、なくなった兄のことなどを、じっと思ひうかべたりしていますと、とつぜん、川の中にさけび声がおこりました。一そりのわたし船が、やのように下ってきた貨物船にしようとして、数人の乗客が、みるみる川波にのまれていきました。

ブルネルは、見るにたえかねて目をつぶりしました。

「ああ、またしても人の命を失ってしまった。一日も早くトンネルをほらなければ——。」

きびしくせきたでられるような気がしました。

かれは、造船所の古い材木に
こしをかけて、いつまでも、そ
こにうずくまっていた。い
つのまにか暗くなって、あたり
はしんとしていました。

その時、足もとのかれ葉の上
に、何やらぱらぱらと、細かな
粉の落ちるような音がしている
のに気がつきました。

「なんだろう。」

かれは立ちあがって、マツチ

をすってみました。

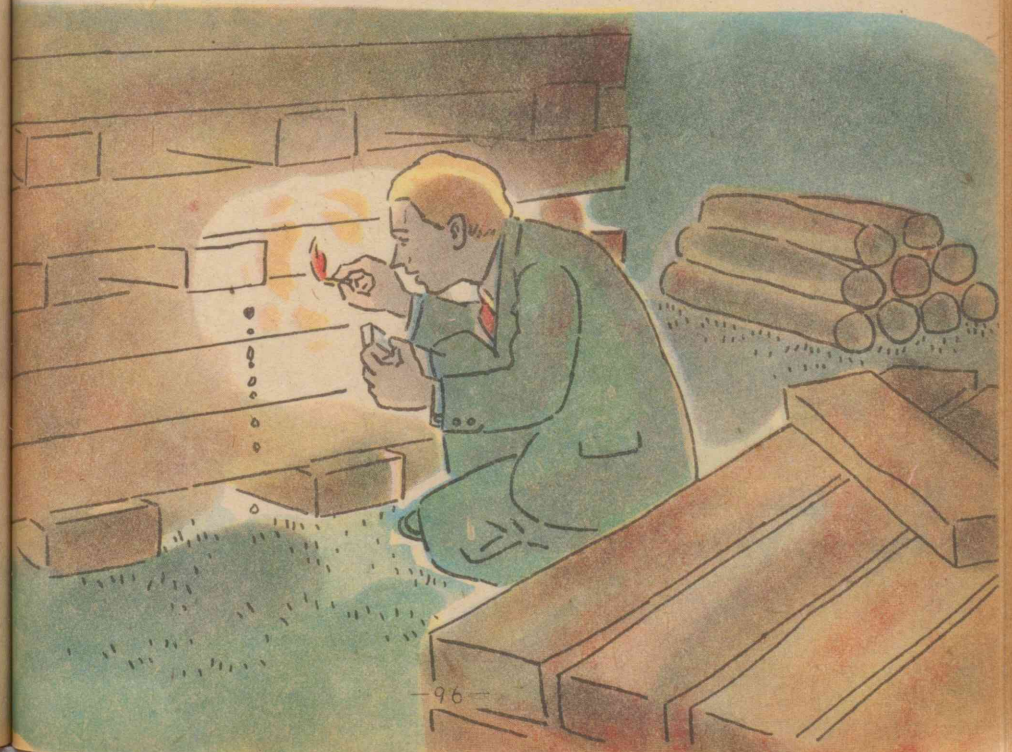
よく見ると、一ぴきの木食い虫が、古い船材を食い破って
いるのでした。ぱらぱらと落ちるのは、虫が木のあなからは
きだす木くずでした。

じっと、その虫の動きをみつめていたブルネルの頭の中に、
その時、ある考えがいなずまのようにひらめきました。

「そうだ。」

かれは、急いで家に帰ってきました。帰ると、すぐ、じぶ
んのへやに飛びこみました。

それからというものは、もう、夜であろうが、昼であろう
が、図面を書いているのは破り、破っては、また、書きました。模



型を組み立ててはぶちこわし、ぶちこわしては、また、組み立てました。

研究のために、仕事をおろそかにしたといふので、工場をやめさせられたこともありました。そのたびに、姉は弟をはげましながら、内職に精を出しました。じぶんは一日ぢゅう食べないことがあつても、弟のために、一きれのパンを用意しない日はありませんでした。

そのために、姉もめつきりやせてしまいました。

しかし、なみだぐましい姉の助けと弟の努力が、とうとうその実を結ぶ日がきました。

一八一八年三月、ブルネルは、トンネルをほる機械の発明に成功したのです。

(四)

しかし、このかがやかしい発明も、ロンドンの市民からは、冷たいわらいをもってむくいられました。

ロンドンの市民は、テムズ川の下にトンネルをほることは、すっかりこりていたからです。ですから、ブルネルの計画には耳もかきませんでした。

けれども、ブルネルのかたい決心は少しも変わりませんでした。熱心にトンネルの必要を説きつづけました。かれが機械を発明してから七年目、とうとう、かれを助ける人があらわ

れました。ウェリントン公という方でした。そのうちに、国会でも、この工事を助けてやろうという議案が通りました。

姉と弟は、だきあってうれしなみだにくれました。

一八二四年、ブルネル式方法によって、いよいよ工事が開始されました。

まず、直けい二十メートルほどのたてあながほられました。それから、横あながほられていくのですが、機械の調子はたいへんよく、二年もすると、工事は予定の半ばに達しました。日になんどとなく土くずれがあつたりして、そのたびに工事場からにげだして帰ってこない者もありました。しかし、最後のひとりになっても、やりぬこうとするブルネルの熱心にひかれて、また、ひとりふたりと帰ってきました。

一八二六年五月十八日、午後一時、ほりかけのトンネルの中に、とつぜん大きな音がひびきわたりました。川の底がくずれたのです。おそろしいいきおいで水が流れこんできました。

にげだすひまもなく、三十四人のとうとい命が、どろ水の中に消え去ってしまいました。この時、ブルネルのこれまでの苦心は、こなごなにうちくだかれてしまったのでした。

「わたしの夫を返せ。」

「わたしのむすこを返せ。」

おこつた人々は、かれをかこんでとなりつけ、なきさけび

工事費はすっかりなくなつてしまひ、機械をひきあげることもできないので、工事は一時中止しなければなりません。した。

しかし、ブルネルは、

「くじけてなるものか。」

と、再びたちあがりました。

かれは、人々に向かつて、成功のみこみのあることを説きました。じぶんはパンと水で生活をしながら、ロンドン市民のために、国家の利益のために、どんな悪口にも、どんなあざけりにも負けないで説きまわりました。

再び資金を集める運動をつづけながら、その間に、トンネルのほり方についても研究をおこたりませんでした。

人々は、ブルネルのこの熱心さに再び動かされてきました。イギリスの政府が、この世界的大工事に対して、今までになかったたくさんのお金を出すことにきまつたのは、あの大事件があつてから六年目のことでした。

ブルネルは奮いました。念に念を入れて細かな計画を立て、喜び勇んで工事にとりかかりました。

その間に、かれの姉はこの世を去つてしまいました。病氣になつた姉は、死ぬ日まで弟をばげましながら、テームズ川



土くずれがあったり、水の流れこむこともありました、鉄のようにかたい心と、注意深い計画によって、工事は着々と進んでいきました。働く人たちも、かれの決心にひきずられて、熱心に仕事をにつづけました。

工事に着手してから十九年目、一八四三年、ついに、大テムズ川の下にトンネルはつらぬかれました。

トンネルの中をかけぬけていったブ

た。
なくなった兄と姉が、いつもかれの耳もとでささやきました。

「どんなことがあっても、くじけてはいけませんよ。」

「失望してはいけません。」

働く人たちが、その日の仕事を終って帰った後も、かれはひとりカンテラをともして工事のあとをみてまわりました。万が一にも、この前のような失敗があったら、生きて帰らない決心でした。

「失望してはいけません。」

「どんなことがあっても、くじけてはいけませんよ。」



ルネルは、大テムズ川をふりかえって、
「にいさん、ねえさん、どうとうやりとげました。」
とさけびました。とめどもなくなみだを流しながら。

ロンドンの市民は、テムズ川のほとりに、感謝をこめて
フルネルの胸像きょうをたてました。かれのまなこは、今も、きり
のたちこめる川の上に、静かに注がれています。

学 習 の 仕 方

一 谷川の音

ここには、おもにどんなことが書かれているか、
気をつけて学習しましょう。

三つの文がどんなつながりをもっているか、書
きぶりがどうちがっているかなど、考えながら
学習しましょう。

あなたも、あらしの日や近くの山や川などにつ
いて考えたり、調べたりしながらこの文の学習
をしましょう。

(一) 谷川の音

山道のけしきについて話しあいましょう。

谷川はどんなになっているか書きだしてみま
しょう。

谷川の工事は、なんのために、どんなことを
するのでしょう。

あなたも、たきを見たときのことを話しあい

ましよう。

山の上に立ってきもちのよいところを書きだ
してみましよう。

さし絵と文を照らしあわせてみましょう。

あらしの日

だれが書いた文でしよう。

いつからいつまでのことを書いた文でしよう。
あらしの強くなっていくるありさまを書いたと
ころを、書きぬきましよう。あらしにそなえ
て、この人たちはどんなことをしたか話しあ
いましょう。

おとうさんのおこないについて話しあいまし
ょう。

あなたも「あらしの日」の作文を書きましよう。

(三) 四品の人

この文を読んで、話ができるようにしましよう。

どくに心をうたれたことを書いてみましょう。
このだいもくは、この文のどこからどつてつ
けたものでしょう。

「ねていて人を起すな」とこの文をくらべて
話しあいをしましょう。

あなたも、町や村のためにつくした人のお話
をしましょう。

二 海に生きる

ここでは、おもに、どんなことが書かれている
か、気をつけて学習しましょう。

三つの文が、どんなつながりをもっているか、
書きぶりでどんなところがちがうかなど、考え
ながら学習しましょう。

あなたも海への生活や、水産業などについて調
べたり、考えたりしながらこの文を学習しまし
ょう。

(一) なぎさ

なぎさ

しばいに出て来る人の人からについて話しあ
いましょう。

このしばいのおもしろいところを書きだしま
しょう。

あなたもこのしばいをしてみましょう。

その場その場の動きについてよく考えてみま
しょう。

(三) くじらを追って

今までの文とくらべて、書きぶりのちがって
いるのはどんなところでしょう。

まとめていうと、どんなことを書いた文でし
ょう。

港を出てから、帰るまでのうつりかわりを、
一つ一つはつきりと書きだしましょう。

くじらをとるとき文は、どんなに書かれて
あるでしょう。なぜそんなに書かれたのか、

まとめていうと、どんなことを歌ったのでし
ょう。

この文のおもしろいところについて話しあい
ましょう。この文を読んで、感じたことを書
きましょう。

さし絵と文をくらべて話しあいましょう。
夜あけ

どんな人がどんなときに歌ったのでしょう。
力強い感じのするところを書きだしましょう。
文を見ないで読めるようにしましょう。

あなたは大きくなったらどんな仕事をした
と思いますか。そのことをこんな文に書いて
みましょう。

(二) 海べの子ども

このしばいに、時、所、人をはつきりとつけ
てみましょう。

どんな話をしばいにしたのか、話してみま
しょう。

考えてみましょう。

この文を読んで、めずらしく思ったことにつ
いて話しあいましょう。

お話をするときの、初めと終りのことばにつ
いて考えてみましょう。

三 展らん会

三つの文が、どんなつながりをもっているか、
気をつけながら学習しましょう。

あなたも展らん会をしたり、ものを作ったりし
たときのことを思い合わせながら学習をしまし
ょう。

(一) 案内状

案内状はどんなことに注意して書いたらいい
でしょう。

どう写版で印刷する仕事のじゆんじよを書き
だしてみましょう。

あなたも案内状を書いてみましょう。

どんなときにどう写印刷をするのがいいか話

しあいました。

あなたもどう写印刷をして、人にくばるものを作ってみましょう。

(二) 展らん会

展らん会には、どんなものをならべておいたでしょう。

ならべたり、はったりしたもののうちで、とくにどんなものがよかったか、書きだしましょう。

そのの、どんなところがよかったのか、話しあいましょう。

学校博物館のところは、前に学習したどの文とつながりがあるのでしょうか。

この文を読んで感じたことを話しあいましょう。あなたも、展らん会のことを作文に書きましよう。

(三) ぼくのトラック

製作で、トラックを選んだわけを考えてみま

(一) 初めての地図

この文をふつうの話になおしてみましよう。

伊能忠敬について、とくに心をうたれたことはどんなことですか。

一つ一つのことばの中に、どんな意味がふくまれているか、よく考えてみましよう。

伊能忠敬について知っていることや調べたことを話しあいましょう。

(二) オランダの少年

この文を読んで、話ができるようにしましよう。

この文を読んで、とくに心をうたれたことを書きましよう。

もし、この少年がいなかったら、どうなっていたかについて話しあいましよう。

人のため、世のためにつくした人の話をしましよう。

(三) テームズ川のトンネル

いつ、だれが、なにをした話か、はっきりさ

しよう。

製作の順序を、はっきりと書きだしてみましよう。

とくに苦心したことはどんなことでしょうか。よく工夫したと思われるところはどんなところでですか。

さし絵と文を照らし合わせながら読みましよう。

あなたも苦心して製作したときのことを作文に書きましよう。

四 人々のために

ここでは、おもにどんなことを書いてあるのか、気をつけて学習をしましよう。

三つの文のつながりと、書きぶりのちがいに注意しながら学習をしましよう。

あなたも人々のために働いた人の話を調べたり、話しあったりしながら学習をしましよう。

せましよう。

(一)(二)(三)(四)(五)には、それぞれどんなことが書かれてあるか、まとめてみましよう。

まとめたことを読んで、この話ができるようにしましよう。

この文を読んで、心をうたれたことを書いてみましよう。

日本の丹那トンネルや、関門トンネルのことなどを調べて、この話とくらべて話しあいましよう。

この話を紙しはいに書いてみましよう。

この本には、おもにどんなことが書かれていますか。

あなたは冬休みにどんな本を読みたいと思いますか。

国語の学習では、どんな仕事をしてみたいと思いますか。

新しいことば

ページ
 4 そびえて
 5 つくつくほうし けわし
 6 ぞう木林 みはらし リュック
 7 谷川 たき
 8 (ふり)そそ(いで) 大雨 水びたし
 9 しわざ よど(んで) ふち
 10 きざむ かみ
 11 グム (何)やら 湖
 12 石がき
 13 われさき
 14 たきつば 水けむり
 15 まが(りました) いただき
 16 さらに
 17 台風

17 けい報 発(せられ) 本土
 上陸 日本海 にぶい
 信じ(られない)
 18 早め タリヤ あやし(く)
 (追い)たてられる
 20 マッチ 用心 かまど
 風速 豊作
 21 (くれ)かけ(た) いっせい たわめ(て)
 ものすごい なまり からみ(あって)
 青きり
 22 ほのお ふざけ(て) かり(橋)
 外出
 23 雨がっぱ かい中電燈
 ねどこ かんばん ちぎられ(た)
 うず

25 大臣 そまつ 治水(工事)
 しご(きながら) (問い)かけ(ました) 川すじ
 26 おも(に) 入用 されば
 中止 政府 なにぶん
 27 いかが
 事情
 28 平気 態度 財産
 (この)際
 29 一身 意気(み) 感げき
 完成 (気が)くる(った)
 30 毎年 きっかけ 一文
 身なり
 31 わらじ すり(へった) あだ名
 川岸
 32 なぎさ ふるい 水鳥
 33

33 足あと しお風 おき
 36 へさき
 37 にしん
 しぶき すみ絵 みるみる
 はて
 38 竹
 39 すな山
 数字 暗号 ぼう険
 後ずさり
 40 日どけい じしゃく
 41 水産試験場
 42 負ける すもう ぎょうじ
 43 円 うわさ どりま(いて)
 44 セルロイド 円ばん かつお
 45 はり金 銀

72	71	70	69	68	67	66	65	65	63		
わりばし	設計図	出品	雨量	内側	筆立	順序	うき草	か	油絵	風景画	はい物
部分	製作	調査	模 ^も 型地図	指人形	どびんしき	コップ	雨水	クレパス	かき	せんたく物	神社
ねん土	車体	共同			かんづめ		ぼうふら				
ものさし											

87	86	85	84	83	81	80	79	78	77	76	74	73		
首都	あふれ(て)	(お)ほうさん	全身	ここえ(た)	材木	オランダ	測量	希望	学問	はまり(こんで)	ちく音機	半けい	下部	底板
ロンドン	しゃが(んで)		うすばんやり		海面	観測	みさき	志(した)	失敗	車輪	かまぼこ			
テムズ川					くさって	少年	心血	平均	車じく	余分				
					ふさ(いだ)									

52	51	50	49	48	47	46
見はり番	目的	おとぎ(の国)	めざす	南緯	南半球	赤道
漁場	氷山	みね	南十字星	神	近海	熱帯
やくら	白夜	谷底	極南	つたえ話	肉積船	不足

63	62	61	59	58	57	56	55	54	53
卒業生	印刷機	鉄筆	文化の日	オーロラ	(二頭)づれ	(十二)頭	解剖夫	引き金	伝声管
図表	位置	やすり板	展らん会	カーテン	しまつ	ほうちよう	いきなり	もり	かじ
記録	ローラー	原紙	省(き)	半年		性質		命中	砲手

登坂造湖量折支停臣協政	府助情要態財際申恩宿完	当冷竹險對財試際申恩宿完	銀漁団港以對財試際申恩宿完	戰勇景的的低伝熱引絶神泳宿完	真展案內的状印管刷筆位絶神泳宿完	順寺序側共刷筆位絶神泳宿完	敗余均才志共刷筆位絶神泳宿完	路往故增資式械查各設厚輪失	民決議直難費再向件奮兄
(4) (5) (10) (11) (11) (14) (18) (19) (25) (26) (26)	(26) (26) (27) (27) (28) (28) (28) (29) (30) (30) (30)	(31) (37) (38) (40) (41) (42) (42) (42) (42) (42) (42)	(45) (47) (48) (49) (49) (49) (50) (50) (50) (50) (50)	(51) (51) (51) (52) (52) (53) (53) (54) (54) (54) (54)	(58) (59) (59) (59) (59) (61) (61) (61) (62) (62) (62)	(65) (65) (67) (68) (70) (70) (70) (71) (72) (72) (72)	(74) (74) (76) (77) (77) (78) (78) (78) (79) (79) (79)	(87) (87) (88) (88) (90) (91) (91) (93) (94) (94) (94)	(99) (99) (100) (100) (103) (104) (104) (104) (105) (105) (107)

開閉橋	通路	往来	おろそか	内職	めつきり
しょうとつ	事故	たてあな	市民	決心	
もぐら	もぐ(つて)		(ウエリントン)公議案	開始	
横あな			直けい	半ば	最後
うばわ(れる)	(土)くずれ	どうとい	こなこな	むすこ	どなり(つけ)
資金	夫	勇かん	水ぎわ	のがれ(て)	ひぎ
ささげ(た)			くじ(いて)		
急死	そう式		勇氣	らんぼう	小船
(大)事業	安全	おちゆう	(難を)さける		
工場	食事	図面	工費	みこみ	あざけ(り)
病人			運動	(世界)的	(大)事件
忠告	つばや(く)		万が一	失望	
わたし船	貨物船	乗客	ささやき(ました)	着々	つらぬか(れました)
造船所	うずくま(つて)		どめどもな(く)	ほどり	胸像
木食い虫	船材	ひらめき(ました)	まなこ	注が(れる)	

本書の中、とくに新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

なぎさ
海べの子ども

山村暮鳥
栗原一登

さし絵

関合正明
浜野正義

堀原健三
堀内規次

そうてい

河野鷹思

新国語四年中
小国 427
なぎさ

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE SEP. 14, 1950)

昭和二十五年九月十四日 印刷
昭和二十五年九月十八日 発行

定価 五十三円

著者

垣内松三
八木橋雄次郎

発行者

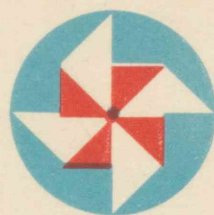
東京都品川区東大崎一丁目五三番地
光村図書出版株式会社
代表者 大江恒吉

印刷者

東京都品川区東大崎一丁目五三番地
株式会社 光村原色版印刷所
代表者 光村利之

発行所 光村図書出版株式会社

東京都品川区東大崎一丁目五三番地



4

中

なま光

広島大学図書

広島大学図書

0130449971



光村図書出版株式会社

文庫

50

971